Revision history and emergence of "the style that differentiates the authors' narrative and the characters' speech"——A focus on the revisions of Xia Shang's novel "Chronicles of the Shanghai Pudong"

JIA Haitao

Abstract

In this paper, taking XIA Shang's 夏商 novel "Chronicles of the Shanghai Pudong"『東岸紀事』(2011) as a case study, we first reviewed the revision history of various editions and then meticulously organized the actual modifications of Shanghainese within the work by comparatively analyzing multiple published versions. This approach allowed us to identify how dialect vocabulary and its stylistic features were incorporated.

To clarify the characteristics of dialect usage in the work and the author's narrative awareness, we introduced an analytical method called "version criticism" 版本批評. This approach traces the signs of exploration in literary languages through the revisions of specific editions, helping us to understand the realities of these modifications.

This method was advocated by literary researcher JIN Hongyu 金宏宇. While classical philology involves the empirical analysis of text versions—examining forms, materials, genesis, and identification of reliable editions—"version criticism" in modern literature aims primarily to verify the changes in the different versions of a work, organize the variations in wording due to the author's revisions, and analyze the reasons behind these changes and their features, as well as the underlying social, political, and ideological demands. The introduction of "version criticism" has proven highly effective in examining the dialect usage and language consciousness of authors from Shanghai.

In this paper, we found that the modifications of literary language in "Chronicles of the Shanghai Pudong" primarily focus on replacing stan-

dardized expressions with dialect vocabulary in dialogue texts where words carry meanings independently, referred to as “actual words” 実詞. On the other hand, although there are fewer modifications to dialect vocabulary in narrative texts, limited vocabulary such as terms for addressing relatives, swear words, and idioms are retained. These modifications and retained elements are positioned both inside and outside the quotation marks, highlighting the stylistic differences between the narrative and dialogue texts as the versions evolve. In other words, the modifications and use of dialect are based almost exclusively on “the style that differentiates the authors’ narrative and the characters’ speech”「叙言分離体」.

版改訂による「叙言分離体」の浮上
―上海作家・夏商『東岸紀事』の方言修正を中心に―

賈　　海　涛

はじめに

中国語の方言には、国民国家が制定した共通語である「普通話」との親疎関係に基づく「二層構造」が存在するとされている。この構造により、民国期の「国語」制定から共和国期の「普通話」への変遷において、共通語へと昇格することで各地域の差が少ない「北方方言」と、共通語に採用されずに従来の地位に甘んじ、言語の差異を地域別に色濃く残す「南方方言」の間で不平等な秩序が形成されたと指摘されている[1)]。

特に、呉語（上海語や蘇州語など）を含む「南方方言」は、普通話の強制や都市化に伴う移動人口の増大により、消失や衰退の危機に直面している。これは方言間の地域偏差、すなわち南北方言に不均衡な関係を表している。

一応、中国の「国家通用語言文字法」の第十六条によれば、戯曲・映画やドラマなどの文芸様式や出版・教育で必要な場合の方言使用は許可されているが、「必要な場合」に対する具体的な基準説明が欠けているため、どのような状況で方言が許可されるかが明確ではない。

この条文の曖昧性が、文芸様式で使用される現実の方言使用において「北方方言」の頻度が「南方方言」よりも顕著に高い傾向をもたらし、不

1）　郜元宝『漢語別史――中国新文学的語言問題』復旦大学出版社、2018 年、246 頁。

均衡を生んでいる。もし「普通話」を「モダナイゼーションのイデオロギーを典型的に表現した、中国流のモダナイゼーションという言説の表象、つまり虚構の『近代言語』」[2] と捉えるなら、「南方方言」はその「近代言語」という権力構造に収斂されない、異質なものとして認識することができるだろう。

「南方方言」が「近代言語」に疎外された一例として、現在に至るまで多くの方言語彙は安定した表記や文字を持たず、表記する際に既存の同音字を借用する必要があることが挙げられる。この背景から、「南方方言」を文学言語に持ち込むための文字化とその表記の習慣を形成する過程は、中国現代文学における歴史的な蓄積が非常に限られていると言える。このような方言使用の蓄積が不足している中で、上海出身の作家はどのようにして「南方方言」に属する上海語を文字化し、文学言語に持ち込むことを試みるのだろうか。

本稿では、上海出身の作家・夏商[3] の長編小説『東岸紀事』（2011 年）を事例として、版の改訂経緯を確認した上で、既に刊行された複数の版を対照的に解読することで作中の上海語の修正実態を緻密に整理し、方言語彙の持ち込み方とその文体的な特徴を確認していく。作中の方言使用の特徴や作家の言語意識を明らかにするために、「版本批評」という分析方法を導入する。これにより、特定の作品の版の改訂を通じて文学言語における模索の痕跡を追跡し、修正の実態を把握するアプローチである。

この方法は、文学研究者である金宏宇によって提唱された[4]。古典文献

2） 坂井洋史『懺悔と越境――中国現代文学史研究』汲古書院、2005 年、358～359 頁。

3） 夏商（旧名、夏文煜）小説家、1969 年上海生まれ。主な作品に、長編小説『乞儿流浪記』（2009 年）、『東岸紀事』（2012 年）などがある。90 年代短編小説でデビューし、『裸露的亡霊』（2001 年）の作品以降、長編小説の執筆が中心である。初期の作品は「先鋒文学」（モダニズム）の色彩を帯びているが、『東岸紀事』においては写実主義へと作風を一変したとされる。2018 年 5 月「夏商小説シリーズ」という選集が出版された。

4） 金宏宇『中国現代長編小説名著版本校評』人民文学出版社、2004 年、3～36 頁、および金宏宇『新文学的版本批評』武漢大学出版社、2007 年、19～63 頁を参照。

学では版本の研究、即ち書物の形態・材料・成立の過程・善本の確定などを実証的に分析するのに対し、近現代文学の「版本批評」は作品の版ごとの変遷を確認した上で、作者の修正による版本間の字句の異同を整理し、そして修正の理由や特徴、ひいてはそれらの背後にある社会的・政治的・観念的な要請を分析することを主目的とする。上海作家の方言使用と言語意識を検証するために、「版本批評」の導入が、高い有効性を持つ理由として次のように考えられる。

中国語において、共通語と方言の相違は、文法や統辞的形態よりも音声レベルで顕著である。方言を表意文字である漢字を用いて表記する際、共通語との音声における差異を適切に表現することは難しい。「版本批評」の採用を通じて、それらの視覚的に識別が困難な方言であっても特定可能となる点がその理由である。

その具体例として、後述の表2における『東岸紀事』修正例（21）では、「知っている、理解している」という意味を表す「知道」という共通語は、上海語では「曉得」と表現される。ただし、「曉得」という表現は上海語に限らず、江淮官話や西南官話でも用いられ、また共通語のカジュアルな会話においても時折使用される。発音は異なるものの、漢字表記は「曉得」に統一されているため、単一の版を参照するだけでは、作者がその単語を方言または共通語としてどのように捉えたかが曖昧である。

そのため、版ごとの修正を考察することで、作者が何度も「知道→曉得」という変更を加えている場合、共通語ではなく方言表記を目的としているか、あるいはその逆を目的としているかが修正の痕跡から判別することができる。それにより、作者が創作や修正の際にどの語を方言語彙として選び、どの語を共通語として残すかを整理することで、その一貫した文体と言語意識を実証的に考察できる点にある。

本稿は文学テクストにおける方言使用を、小説の文体問題の一環として

考察する。方言や地域言語が文字化される際には、地域を超えた言語共同体の読者にも理解されやすくなるよう、国民国家による「言語規範」の要請に応じて文体の変形が施されることがある。この変形を通じて、通常「言語規範」によって疎外されがちな文字化された方言や地域言語が、国民国家の領域内で流通・閲読されうるテクストへと変容する。そのため「版本批評」を通じることで、作品の修正実態を把握し、文学テクストにおける方言使用の文体がどのように変形したかを考察することができる。

1.『東岸紀事』の版本の変遷

夏商の長編小説『東岸紀事』の初出は、2012年の文芸誌『収穫』である。その後、2013年に上海文芸出版社から単行本の初版が出版され、2016年には華東師範大学出版社から改訂版が出された。この作品の題名「東岸」は、小説の舞台である上海市内を流れる黄浦江の東岸エリア、即ち「浦東」[5]を指し、『東岸紀事』という題名は、「浦東での出来事を綴った記録」という意味である。一方で、黄浦江の西岸エリアである「浦西」は、旧租界エリアをはじめ、歴史的に形成された上海の主要な市街地を指す。

『東岸紀事』は1970年代初期から1990年代初頭の「浦東開発・開放」戦略が開始される時期まで描いた物語である。1991年には、浦東開発の象徴である浦東と浦西の旧南市区（現在は黄浦区）を結ぶ「南浦大橋」が竣工した。この小説では、南浦大橋の建設をはじめとする大規模インフラ

5）ここでは、二つのレベルの「浦東」を区別する必要がある。それは行政区画としての浦東と、上述した地理概念としての浦東である。前者は1990に策定された浦東開発戦略に基づき、1992年に設立された浦東新区を指す。一方、『東岸紀事』における浦東は、1990年代の歴史の転換点となる前の地理概念としての浦東である。1970年代や1980年代の浦東は都市化がまだ進んでおらず、「国際都市」や「東洋のマンハッタン」といったイメージとはかけ離れた都市の周縁にすぎなかった。

図１　『東岸紀事』各版の表紙
（図左から『収穫』版、初版、改訂版の順）

整備による立ち退きや、それに対する地元住民の抵抗、移住者の都市社会への適応過程とそれに伴う方言やアクセントの分岐による社会的差別など、再都市化が進む浦東で生じた社会問題が扱われている。

小説の本筋は、浦東出身で容姿端麗なヒロイン・喬喬を中心に展開される。喬喬の父親は浦西出身の公務員であるため、彼女は浦東弁（本稿では上海語に属する下位方言を「〇〇弁」と称する）と浦西の市街地で話される上海語の両方を流暢に操り、幅広い人脈を持っている。後に彼女は上海師範学院に進学し、その才能と美貌により多くの男性から思いを寄せられるが、図らずも望まぬ妊娠で退学処分になってしまう。

本来ならば順調な人生を歩むはずであった彼女は、打ちひしがれ、紆余曲折の末、賭場を仕切る崴崴（ワイワイ）という不良少年の愛人に成り果てる。崴崴（ワイワイ）は浦東で育ち流暢な上海語を操るも、その名前からは南西部の辺境、雲南省の少数民族の出身を匂わせる。落ちるところまで落ちた喬喬は惣菜店を営みつつ、細々と生活していた。しかし、そんな彼女の境遇をよそに、浦東は都市化および工業化に伴う成長期に突入し、南浦大橋の建設に伴い喬喬

は立ち退きを余儀なくされる。その結果、彼女は浦東の繁華街から遠く離れた、政府が提供する公共住宅に引っ越すはめになる。

このように本筋をまとめると、『東岸紀事』は主人公喬喬の成長を描いた物語として、彼女が成長していく過程を中心に単線的な展開を採用しているように思われがちである。しかし、実際の物語は非線形で構成されている。つまり、喬喬が主要な登場人物であるにもかかわらず、彼女の物語と直接関係しないような人物の逸話や、地域で伝承されている歴史（所謂「野史」）、その時代の人々の服装など風俗に関するエピソードが、ストーリーの所々に挿入されている。さらに、これらのエピソードは、小説の初版刊行後に増補されたもので、単独の小説として成立するほどに、比較的独立した内容となっている。このように『東岸紀事』は、多層的で複雑な構造を持つ作品として位置付けられている。

次に、作者・夏商へのインタビュー[6]や小説の後書きを参照し、『東岸紀事』の版本変遷を整理しておきたい。夏商はインタビューにおいて、『東岸紀事』の執筆過程について次のように述べている。

> 大体2004年に執筆を開始しましたが、その前に六里鎮という町へ写真を撮影しに行きました。今では当時の面影はすっかり消えてしまいました。浦東は1980年代の末から開発が始まり、2004年までに六里鎮はほぼ解体されていました。自分で撮ったこれらの写真を見ながら、田舎の記憶について書き進め、ゆっくりといくつかの段落を完成させました。その間にプーアル茶のビジネスも手掛けており、少し気が散ることもありましたが、前後合わせて約7年かけて、昨年（＊2011年）の上半期に執筆を終えました。その後、出版と発表の過程

6）　主に夏商『回到廃話現場――夏商講談録』（華東師範大学、2015年）で収録されたインタビューを参考にした。

でいくつかの修正を加えました。

このように、同作が出版される6年にわたる創作期間に、上海語の叙述文で、全体の三分の二まで書き進めた「手稿」と見なされる版が存在している（以下「手稿一」）。ただ、上海語がわからない読者でもテクストをスムーズに読めるようにするため、叙述文における方言使用を大幅に削除した「手稿二」が存在する。

『東岸紀事』は最初『収穫』誌の「長編小説特集号・2012年春夏巻」に掲載された（以下「『収穫』版」）。この版は方言使用を抑えた「手稿二」に基づき、さらに掲載誌の紙幅制限により、原稿の文字数は46万字から25万字へと大幅に削減されている。削減された内容は、前述のように、物語の本筋から逸れる地理・歴史・風習や人文的逸話などに関する特定地域の風俗史である。2013年に上海文芸出版社から出版された『東岸紀事』の単行本（以下「初版」）は上下巻に分かれ、『収穫』版では削除された20万字程度の内容が新たに増補されている。

その後も、『東岸紀事』の修正作業は続く。読みやすさを保ちつつ地域色を強化することを目的として、2016年の華東師範大学出版社から改訂版が出されるのだが、夏商は改訂版の後書きで、「構成上の修正は行わなかったが、作業量は相変わらず多く、主に話し言葉や会話の趣を浮き彫りにした。初版では、他地域の読者に配慮し、彼らを惹きつけるために、上海語を一部削除したが、改訂版ではできるだけ復元し、元の味をそのまま再現するようにした」[7] と述べている。つまり夏商は『東岸紀事』の『収穫』版と初版を世に出す際、読者の反応に及び腰であったためかもしれないが、当初は「言語規範」の要請に応じて文学テクストの方言使用に対し

7）　夏商『東岸紀事』華東師範大学出版社、2016年、613頁（以下に「前掲書」は2016年の改訂版を指す）。

て保守的な姿勢を示していたのである。

しかし、初版刊行後、『東岸紀事』は一般読者から批評家に至るまで「これまでの小説の全てがより注目され」[8] と述べるほど、肯定的な評価を受けることに成功し、作品の成功により、大きく裁量を得た夏商は、改訂版では自らの創作の初心に忠実であるよう心掛け、作品の独創性を優先させることにした。改訂版では、全体の筋書きの変更はなかったものの、会話文における方言語彙の使用頻度が大幅に増加し、2018 年には、『東岸紀事』と夏商の他の作品を含む「夏商小説シリーズ」が華東師範大学出版社から出された。これは「定稿本の性質を持つ」[9] 最新の版であり、改訂の程度は極めて小さいとされる。

このように、『東岸紀事』は 2012 年『収穫』版から始まり、2013 年の初版、2016 年の改訂版による本格的な修正を経て、2018 年のシリーズ版に至るまで、わずか数年のうちに、作品の修正や版の改訂が繰り返し行われている。以下の表 1 にて、『東岸紀事』の創作と版本の変遷を整理する。

表 1 『東岸紀事』版本の変遷

年	版本（出版社）	修正に関する説明
2005～2011 年（創作段階）	手稿版一（未公開）	書き終えた部分は三分の二程であり、会話文はすべて上海語
	手稿版二（未公開）	会話文を普通話に修正
2012 年	『収穫』版（『収穫』長編小説特集号・2012 年春夏巻）	「手稿版二」に基づき 25 万字に圧縮
2013 年	初版（上海文芸出版社）	エピソード増補により 46 万字に拡大
2016 年	改訂版（華東師範大学出版社）	会話文を上海語に修正（手稿版一に基づくと推測）
2018 年	シリーズ版（華東師範大学出版社）	改訂版に基づく

表１が示す通り、複数の版の中で、二回大幅な改訂が施されている。初めに『収穫』版から初版への変更では、内容が補足された。次に、初版から改訂版への修正では、特に方言使用に関する変更が加えられた。以下、これらの内容補足の特徴と方言使用の変更をそれぞれ分析する。

2.『東岸紀事』における方言修正

『東岸紀事』の修正の実態を明らかにするために、それぞれの版で行われた字句の修正を詳細に分析し、文学言語の改訂について検証を進める。具体的には『収穫』版、初版、改訂版の三つを対比し、修正箇所と無修正箇所を以下の二つのカテゴリーに分けて考察する。ひとつは文学言語の修正が行われた箇所であり、もうひとつは複数の版を通じて方言語彙が保持された箇所である。

2.1　文学言語に関する修正の施された箇所

前述したように、『東岸紀事』は約 46 万字の大作であり、複数の版が存在する。詳細な版間比較を行うため、準備作業として『収穫』版を底本とし、その後の初版と改訂版での修正箇所をすべて対照的に検証した。しかし、本稿の紙幅の制限により、具体的な修正箇所の分析は各版の第一節を例として行い、修正された箇所を視覚的にもわかりやすくするため、表２の形式で一覧化して提示する。

8）　夏商前掲書『東岸紀事』、614 頁。
9）　夏商『東岸紀事』華東師範大学出版社、2018 年、1 頁。

表 2　夏商『東岸紀事』（第一節）各版本の方言修正箇所の一覧表

（引用符付きは会話文、なしは叙述文である。太下線部は改訂版で修正された方言語彙の箇所。点線部は『収穫』版もしくは初版でそのまま保持された方言語彙の箇所。波線部は方言以外の修正箇所。）

通番	『収穫』版（左側の段L・右側の段R行数／頁数）	初版（行数／頁数）	改訂版（行数／頁数）	日本語訳
1	「有事找我？」（L89/29）	同『収穫』版	「有事尋我？」（6/5）	「私に何か用かしら？」
2	両辺擺開陣勢，他“老卵”地向対方老大叫陣単挑。（R89/32）	同『収穫』版	両辺擺開陣勢，他“老卵”地向対方老大叫陣単挑。（7/8）	両端に別れて陣取ると、彼は「乱雑に」相手を挑発し続けた。
3	“練我們這趟拳的，就是要長点肉。再説，阿拉喬喬也没嫌棄我。”（L90/28-29）	同『収穫』版	“練阿拉這趟拳的，就是要長点肉。再講，阿拉喬喬也没嫌棄我。”（8/5-6）	「俺たちの拳法を習うためには、筋肉をつける必要がある。それに、喬喬は俺のことを嫌うこともないんだから。」
4	“崴崴今天夜里請你看電影。”（L90/34）	同『収穫』版	“崴崴今朝夜里請你看電影。”（8/11）	「崴崴は今夜、あなたを映画に誘うって言ってたよ。」
5	“你応該清爽，我約你出来就是想睡你。”（L90/36-37）	同『収穫』版	“你応該清爽，我約你出来就是想睏你。”（8/13）	「あなたはよく知っているはずだ。誘ったのはエッチしたいからだよ。」
6	“等一会儿我先出去，……”（L90/38-39）	同『収穫』版	“等一歇我先出去，……”（8/14）	「ちょっと待って、先に出かける、……」
7	“姨娘説的是真的麼？”（R90/16）	同『収穫』版	“姨娘説的是真的哦？”（9/13）	「叔母さんが言ったことは本当なの？」

8	“説是公主有点誇張，可也不是一点不沾辺。其実雲南土司很多，大土司是軍閥，有槍有武装，小土司就是養了幾個打手的地主，有些更小的連地主都談不上，農忙還要去地裏幹活呢。”（R90/17-20）	“説是公主有点誇張，可也不是一点不沾辺。其実雲南土司很多，大土司就是軍閥，有槍有武装，小土司就是養了幾個打手的地主，有些更小的連地主都談不上，農忙還要去地裏幹活呢。”（5/16-19）	“講是公主有点誇張，不過也不是一点不沾辺。其実雲南土司老多的，大土司就是軍閥，有槍有武装，小土司就是養了幾個打手的地主，有些更小的連地主都談不上，農忙還要去地裏做生活呢。”（9/13-16）	「お姫様と言うと少し大げさだが、まったく関係がないわけではない。実は雲南には少数民族が多く、大きな族長は軍閥で、銃を持って武装していたが、小さな族長は何人かの子分を養っている地主にすぎない。さらに小さいものは地主とも言えず、農業の繁忙期には畑で働く者さえいる。」
9	“那個召存信為什麼不当土司了？”（R90/21-22）	同『収穫』版	“那個召存信為啥不当土司了？”（9/17）	「あの召存信はなぜ族長にならなかったのか？」
10	“……你的歳就是从他那来的。”（R90/34-35）	“……你的歳就是从他那儿来的。”（6/6）	“……你的歳就是从他那儿来的。”（10/3）	「あなたの歳歳は彼のところからきたのだ。」
11	“是誰讓我裙子吃了鼻涕？”（L91/2-3）	同『収穫』版	“是啥人讓我裙子吃了鼻涕？”（10/16-17）	「私のスカートに精液をつけたのはあなたじゃない？」
12	魚腥的気味弄得她膩心又心疼。（L91/8）	同『収穫』版	魚腥的気味弄得她膩心死了。（10/21）	彼女は生臭い匂いで吐き気がした。
13	“阿姐們”歓喜死他了。（L91/46）	“阿姐们”喜歓死他了。（8/17）	“阿姐们”喜歓死他了。（12/12）	「おねえさんたち」は彼のことが死ぬほど好きだった。
14	×	賊忒兮兮的腔調（8/21）	賊忒兮兮的腔調（12/16）	頭のおかしい口調

15	“走這麼快做什麼？”（R91/16）	同『収穫』版	“走這麼快做啥？”（13/10）	「そんなに速く歩いてどうするんだ？」
16	“六里衛生院怎麼樣？”（R91/19）	同『収穫』版	“六里衛生院哪能？”（13/12）	「六里衛生院はどうだろう？」
17	“等你当上衛生院院長再説吧。”（R91/20）	同『収穫』版	“等你当上衛生院院長再講好哦。”（13/14）	「あなたが保健所長になってからにしましょう。」
18	×	她有些後悔，吹牛就由他吹呗。（9/20-21）	她有些後悔，吹牛就由他吹好了。（13/15-16）	「彼女は少し後悔した。ほらを吹くなら、彼の好きにしろ。」
19	“你干什麼？下作坯。”（R91/29-30）	“你干什麼？下作胚。”（10/5）	“做啥？下作胚。”（13/23）	「何してるんだ？この野郎！」
20	×	小開拉住她小臂：“你胸罩什麼牌子。”//喬喬掙開他：“関你什麼事情。”（10/6-7）	小開拉住她小臂：“你胸罩啥牌子？”//喬喬掙开他：“关你啥事体？”（14/1-2）	小開は彼女の腕をつかんで、「ブラジャーはどんなブランドだ？」と言った//喬喬は振りほどいて「あなたには関係ない！」と言った。
21	喬喬罵道：“要死了，你這個下作坯。”//小開説：“你知道胸罩什麼牌子最好？……”//喬喬跑起来，一辺整理衣服一辺罵：“下作坯，幫你老嬢去買吧。”（R91/33-37）	喬喬罵道：“要死了，你這個下作胚。”//小开説：“你知道胸罩什么牌子最好？……”//喬喬跑起来，一辺整理衣服一辺罵：“下作胚，幫你老嬢去買吧。”（10/9-12）	喬喬罵道：“要死了，你這隻下作胚。”//小開説：“晓得胸罩啥牌子最好哦？……”//喬喬跑起来，一辺整理衣服一辺罵：“下作胚，幫你老嬢去買哦。”（14/4-7）	喬喬は「死ね！この野郎！」と罵った。//小開は「一番いいブラジャーのブランドは知ってるか？……」//喬喬は走り出して、服を正しながら「この野郎！　知ったこっちゃない！」と罵った。

22	“這個赤佬，末了還是在女人身上翻了船。”	“這個赤佬，終煞還是在女人身上翻了船。”	“這個赤佬，終煞還是在女人身上翻了船。”	「あいつ、結局女のことで痛い目を見た。」

表２から明らかなように、『東岸紀事』における版本間の変遷は、主に初版から改訂版への過程で顕著である。特に、作中人物の会話文の内、引用符で括られた部分に改訂が集中している。

具体的には、『東岸紀事』における文学言語の修正箇所は、主に以下の三つのカテゴリーに分けることができる。

第一に、誤植や文法上の一般的な修正である。例としては、(8) での副詞「就」の補足や（19）と（21）の「下作坯→下作胚」（品性が卑しい人）などが挙げられる。表２は方言に関する修正のみのリストであるため、その類の修正箇所は、作品中に数多く存在し、表２で記載したものはその一部にすぎない。

第二に、方言語彙から規範化された表現への置き換えである。修正数は少ないものの、修正箇所は主に叙述文に集中している。具体例として、(13) の「歓喜→喜歓」（好き）の修正が挙げられる。「“阿姐們”歓喜死他了」（「おねえさんたち」は彼のことが死ぬほど好きだった）という文は会話文ではなく叙述文に属し、初版では上海語の「歓喜」から普通話の「喜歓」に修正されている。

第三は、本稿で最も注目する、規範化された表現から方言語彙への置き換えに関する修正である。具体的には夏商の『東岸紀事』における修正箇所は以下の品詞に集中する傾向が見られる。

(1)　疑問詞では、「為什麼→為啥」（なぜ、どうして）、「干什麼→做啥」（いったいどうして、～してどうするんだ）、「誰→啥人」（だれ）、

「怎麽様→哪能」（どんなに、どうか）、「哪里→啥地方」（どこ）など。

(2) 動詞では、「找→尋」（探す）、「説→講」（言う）、「睡→睏」（眠る、セックスする）、「知道→曉得」（知っている、理解している）、「喜歓→歓喜」（好き、好む）、「幹活→做生活」（仕事をする）など。

(3) 名詞や代名詞では、「我們→阿拉」（私たち）、「今天→今朝」（今日）、「事情→事体」（事柄）、「話→閑話」（言葉、方言）、「家（里）→屋里廂」（家の中）、「臉→面孔」（顔）など。

(4) 形容詞に関しては、「清楚、干淨→清爽」（はっきり、清潔な）、「不錯、好→灵」（悪くない、よい）、「厲害→結棍」（ものすごい）など。形容詞自体の改訂の他、普通話において形容詞の前に程度副詞「很」（元々は「とても」の意味であるが、通常、文の体裁を保つための意味がない飾りとして使われている）をつける構文は、ほぼ上海語の「老＋形容詞＋（噸）」という構文に修正されている。

(5) 数量詞では、「個→只（一個饂飩→一只饂飩）」（一個（一個のワンタン））、「会→歇（等一会儿→等一歇）」（しばらく（しばらく待って））など。

以上の品詞ごとに分類され、規範化された表現から方言語彙へ置き換えた修正例には、次のような特徴が見られる。名詞・動詞や形容詞といった単独で意味を有する「実詞」が方言に置き換えられる例が最も多いが、一方で、介詞や助詞など文法の補助として単独で意味を持たない「虚詞」についての修正は少ない[10]。例外として主に会話文で重複を避けずに多用

10) この特徴は、長編小説『繁花』の方言修正と類似している。つまり、言語学者・沈家煊が述べているように、方言修正の原則は「『虚詞』はできるだけ共通語の語彙に修正し、『実詞』はできるだけ方言語彙を保持させる」ということである（沈家煊『《繁花》語言札記』二十一世紀出版社集団、2017年、12～13頁）。

される文末表現「哦」と「噸」は保持されている。「哦」は普通話の「吧」（だろう）に相当し、推測の意を表すことが多く「噸」は普通話の「的」（～のだ）に相当し、事情の説明や軽い断定の口調を示す場合に使われる。

この二つの虚詞が保持されている理由について、作者からの具体的な説明はないが、次の二つの理由が考えられる。第一に、これらは方言特有の表現であり、馴染みのない漢字を使用しているため、テクストを通して読者に方言であることを直接的に示す文体的指標となる。

第二に、これらの虚詞は文末に位置する補助的なものであり、文の理解を妨げることがないため、全体の文の流れを損なうことなく使用することができる。このように、『東岸紀事』において、これらの方言語彙が保持された理由は、テクストの理解可能性を確保しつつ、方言の特徴を保持するための戦略的な選択と考えられる。

以上の分析から『東岸紀事』のそれぞれの版本において修正された字句の「異」を比較することで、次の二点が明らかになる。第一に、文学言語における修正は、規範化された表現から方言語彙への置き換えに集中していること、第二に、方言語彙へ置き換える修正が行われる際、単独で意味を持つ「実詞」が主な対象とされていることである。

2.2　方言語彙が保持される箇所

次に、『収穫』版から改訂版にかけての字句の「同」、すなわち特定の種類の方言語彙が叙述文と会話文に関わらず一貫して保持されている点について検証していきたい。具体的には次の三つのカテゴリーがある。

(1)　罵り言葉。表２の（21）の「下作坯→下作胚」（品性が卑しい人）、（22）の「赤佬」（ろくでなし）などが含まれる。

(2)　三文字か四文字、あるいはそれ以上の数の漢字からなる熟語。一

部は罵り言葉に分類可能である。これには「毛估估」（ざっと計算する）、「拆爛污」（いい加減な仕事をしたり、責任を持たずに放置したりする状況）、「瞎話三千」（でたらめばかり言うこと）、「渾身不搭界」（一切関係がない）などが含まれる。

(3) 家族や親戚を指す呼称。例えば「姆媽」（お母さん）、「阿爸」（お父さん）、「爺娘」（両親）、「小囡」（子ども）などがある。

これらの語彙が、方言の出現率の低い『収穫』版から改訂版にかけて保持されている。その理由は、次のように考えられる。まず、家族・親戚の呼称や罵り言葉は字形上、普通話と共通であるため、漢字の外観から方言の意味を容易に確認できる。例えば、上海語の「姆媽」と普通話の「媽媽」や、「赤佬」の「佬」が一般に人に対してネガティブな意味を持つ表現であるため、これが方言の罵り言葉であることを容易に推測できる。

さらに、罵り言葉の意味を読み手に把握させるために、叙述者が叙述文中に解説を挿入することもある。例えば、以下の解説がその一例である。

> 涓子は喬喬に、家を出てどこに行ったのか尋ねた。喬喬は言いたくない様子で、苦笑いして返答を避けた。それを見た涓子はそれ以上問うことはしなかった。涓子のこのような性格を、上海人は「拎得清」と呼ぶ。これは思慮分別があるという意味である。
>
> 原文：涓子問過喬喬，離家出走去了哪儿？喬喬不想説，沖她苦笑了一下，涓子就不問了。涓子這種性格，上海人叫“拎得清”，就是比較明事理的意思。[11]（太下線、波線は引用者によるもの）

この引用は『収穫』版には含まれず、初版と改訂版では修正されていな

11） 夏商前掲書『東岸紀事』、419 頁。

い方言語彙の一部である。上海語の熟語「拎得清」は、小説全体で六回登場し、その最初の使用例が上記の引用である。

叙述者はこの部分で「上海人」という集合的主体の規範に基づいて涓子の性格を「拎得清」と評価し、さらにこの言葉が「思慮分別があることを意味する」と解説している。この解説は実際に方言語彙を注釈する機能を果たしている。

また、もうひとつの罵り言葉は、『東岸紀事』に繰り返し登場する南京方言（北方方言の江淮官話に属している）である。

> 「ここにいる皆さんは、華東師範大学の夏雨詩社や復旦詩社を聞いたことがある方もいるかもしれませんが、決して嚼蛆詩社と混同してはいけません。夏雨詩社って女っぽい名前だし、一見して安っぽい（一鼈叼棗）！　ぐにゃぐにゃしたランボーを思い出させます。復旦詩社はさらに恥ずかしい、名前からして官僚的な意味が満ち溢れています。しかし『嚼蛆』は民間のもの、サブカルチャーの精神的な故郷です」。
>
> 曹寛河は話の穂を継いだ。「私たちは本物の詩を追求しています。それは決して妥協しない前衛派であり、ブレイクであり、リルケです。耐え抜くことが、すべてを意味します」。[12]（太下線は引用者によるもの）

この引用は、1980年代後期、喬喬が参加していた詩社が設立された時、その組織の代表が、当時の大学生の間で流行していた情熱溢れる「文芸調」で詩社の目的を語る場面である。公的な場で、詩社の代表者が各地域から集まった大学の新入生に向けて「精神的な故郷」や「妥協しない前衛派」といった抽象的かつ高尚な理念を知的に語る最中に、突然「一鼈叼

12）　夏商前掲書『東岸紀事』、44頁。

棗」という南京方言の罵り言葉を用いて、競争相手である他大学の詩社を批判し始めたのである。この知的な規範的表現の会話文中に、唐突に登場する方言語彙の罵倒語は非常に目立つものである。

そして、方言や訛りに敏感な喬喬は、詩社の代表者の言葉を聞いた際、「彼は南京出身のようだ。アクセントは周家弄に住む南京出身のおじさんと同じで、そのおじさんも『一鼈叼棗』と言っていた」と感づく。続いて叙述者はその罵り言葉の意味を「非常に乱れていて、くだらないこと」[13] と説明する。

以上の例からわかるように、『東岸紀事』では、登場人物の出身地に応じた粗野な罵り言葉や熟語などの特定の方言語彙が『収穫』版から、そのまま保持されている。では、なぜこれらの方言語彙としての粗野な罵り言葉や熟語が用いられ続けたのだろうか。

まず、これらの語、特に罵り言葉は、標準語で表現される抽象的かつ一般的な解釈ではなく、話者の身体的直感に根ざし、瞬間的な情動を反映する具体的かつ直接的な表現である。罵り言葉の使用は「人間が嬉しい、楽しい時に笑いを我慢できないように」、日常生活の中で「ある人、ある事物、ある現象などに対して感じる不快な情動によってもたらされる」[14] ものだといえる。

次に、罵り言葉や熟語は、主に日常的な生活世界においてのみ使われ、文化的に優位性を持つ書記言語の範疇に含まれない下品な表現とされがちである。これは、意思疎通のために歴史的に形成されてきた地域的な言葉

13） 夏商前掲書『東岸紀事』、44 頁。原文「在座的同学可能聴説過華東師大的夏雨詩社，還有復旦詩社，千万別把嚼蛆詩社和它們混淆，夏雨詩社？嬢嬢腔的名字，一鼈叼棗！譲人想起軟塌塌的蘭波。復旦詩社更可恥，名字就充満官方意味，而《嚼蛆》是民間的，是亜文化的精神家園。」

曹寛河接岔道：“我們追求真正的詩歌，是永不妥協的先鋒派，是布勒克，是里爾克。挺住，意味着一切。”

14） 渡辺博文「近代中国文学作品における罵倒語の使用の要因――情動による考察――」、『神奈川大学大学院言語と文化論集』第 12 号、2005 年、102 頁。

に比べ、人為的に創出され、制定された共通語は、精細かつリアルな地域的知や文化記号を表現できないことに起因する。したがって、罵り言葉や熟語に含まれる複雑な情動や地域的な規範、価値秩序といった「俗」な要素を、比較的「雅」な書記言語である共通語に「言語内翻訳」をすることは困難である。

そのため、罵り言葉や熟語を文学テクストに持ち込み、解説を加える語り行為は、地域的知や言葉に関して馴染みのない読者と情報共有を図ろうとする叙述者の姿が潜んでいる。また、版の改訂で保持される罵り言葉や熟語が、会話文に限らず叙述文にも浸透していることは、次の節で考察する「叙言分離体」と関連してくる。

3. 版改訂による「叙言分離体」の浮上

表2から、修正された箇所を分析すると、以下のような文体的特徴が明らかになる。それは、規範化された表現から方言語彙への修正が主に登場人物の会話文に限られ、叙述文は規範的な言葉遣いで一貫しているという点である。このような、叙述文と会話文の言語使用における分離に対して、筆者独自の、文学言語における「叙言分離体」[15] という用語を用いて説明する。この分離の根源を遡ると、長い歴史的な系譜が整理されるが、ここでは小松謙の見解[16] を借りて簡単に整理する。

小松によれば、中国における高度な抽象性が要請される書記言語の体制の中で、文学言語における様式分化、即ち「せりふ」（言）と「描写」（叙）は、「雅と俗」「支配階級と庶民階級」「抽象と現実」などの枠内で認識されうる。「描写」（叙）は、洗練され誤解を生ずる余地もない、高度な

15）　詳細は拙稿「方言文学における「叙言分離体」――五四時期の文学言語の変容に関する議論を中心に」、『中国：社会と文化』第37号、2022年7月を参照。
16）　小松謙『「現実」の浮上――「せりふ」と「描写」の中国文学史』汲古書院、2007年。

論理性と抽象性が要求される、支配階級による書記言語である。「せりふ」（言）は、リアルな庶民の語り口を導入することで具体的な情景を繊細に再現し、庶民の趣向に適合する現実描写志向の文学言語である。

両者はそれぞれ競合しながらも、異なる機能を分担しあうような混合的な関係を示している。受容者のレベルでも、書かれる対象のレベルでも、庶民の発見や個人による内面の表白を特徴とする近代文学は、言うまでもなく現実描写を志向とするものに由来している。現実描写志向の一歩として、「叙言分離体」は、叙述者と発話者間、および複数の発話者間で言葉の主体が交替することを文学言語の内部で再現し、実際の発話場面を写実的に描く機能を持っている。

このような「叙言分離体」は、『東岸紀事』において版の改訂を通じて形成してきた。その修正経緯をより詳細に把握するために、ここでは第七節の修正例を取り上げる。

表 3　夏商『東岸紀事』第七節の修正例

初版	改訂版	日本語訳
来的最多的是単位里的哥們，這些多半是付錢的，開個収拠，可以報銷。他們的話題主要是犯人和女人，有時也談些単位里的事情。 這天唐管教下班，帶了両名同事回店里，坐下就抱怨，“你説那美国記者脳子有病吧，我們用不用犯人干活和他有什麼関係啊。” 同事甲道：“就是，狗拿耗子，中国又不受美国領導，憑什麼跑来指手画脚。” 同事乙道：“不過你還別説，那美国人的中国話説得	来的最多的是単位里的哥們，這些多半是付錢的，開個収拠，可以報銷。他們的話題主要是犯人和女人，有時也談些単位里的事情。 這天唐管教下班，帶了両名同事回店里，坐下就抱怨，“你講那美国記者脳子有病哦，阿拉用不用犯人做生活和他有啥関係啊。” 同事甲道：“就是，狗拿耗子，中国又不受美国領導，憑啥跑来指手画脚。” 同事乙道：“不過不要講，那美国人的中国閑話説得真	最もよく来るのは同じ監獄の仲間たちで、これらのほとんどはお金を支払っていて、経費として精算できる領収書を切ってもらう。彼らの話題は主に犯罪者や女性についてで、時には部署内のことについても話す。 ある日、唐管教は仕事を終えて同僚二人を連れて店に戻り、座るなり不満を漏らした。「あのアメリカのジャーナリスト、頭おかしいって思わない？　犯罪者を働かせることが彼に何の

真不錯。” 唐管教道：“在中国待久了，你去美国十年，英語肯定也滚瓜爛熟。” 同事甲道：“你這儿新来的那個服務員漂亮啊。” (p. 95/14-22)	不錯。” 唐管教道：“在中国辰光長了，你去美国十年，英語肯定也滚瓜爛熟。” 同事甲道：“你店里新来的那個小姑娘漂亮噻。” (p. 98/8-17)	関係があるんだ。」 同僚甲は言う。「まったくだよ。余計なおせっかいだ。中国はアメリカの指導を受けていないんだから、何様のつもりで指図されなきゃいけないんだ」。 同僚乙は言う。「でも、あのアメリカ人の中国語、本当に上手だよね。」 唐管教は言う。「中国に長くいればそうなるよ。お前がアメリカに10年いたら、英語だってペラペラになるさ」。 同僚甲は言う。「お前のところに新しく来たあの店員、きれいだな」。

この引用部は、飲食店を経営する唐管教と二人の同僚が店内で会話する場面である。彼らの話題は中米関係からアメリカのジャーナリストが使う中国語のアクセントに移り、最終的には新しい店員である主人公、喬喬の容姿に注目が向けられる。

この部分は、『収穫』版にはなく、初版で増補され、改訂版では規範的な言葉遣いから方言語彙への変換が施された。修正された箇所には、例えば名詞では「話→閑話」、動詞では「説→講」、疑問詞では「什麽→啥」などがあり、これらはすべて会話文に限られているが、叙述文では規範的な言葉遣いで一貫している。

特に次の三つの表現に注目したい。一つ目は、会話文にある「這儿」（ここで）は、北京方言を象徴する北方方言に多く登場する「儿化（アール）」[17] 付

17）「儿化」とは、漢字では「儿」と書き、その前の音節がr化する。北京方言を代表とする官話（北方方言）の多くで、習慣的に決まった語彙がそり舌調音を伴う母音で発声されること（日本中国語学会編『中国語学辞典』岩波書店、2022年、「r化」項目を参照）。

きの話し言葉であるが、改訂版ではより北方方言的な要素を排除した「店里」（店の中で）という表現に変換されている。

二つ目は叙述文にある「哥們」（兄弟たち）という友人間の呼び方である。これはやや北方方言に近い表現であり、改訂版ではそのまま保持されている。

三つ目は、同じ意味の言葉が異なる文脈において異なる表現で用いられている点である。「事情」（事柄）という実詞が、表３の修正例には登場しないが会話文では上海語の「事体」に修正されているのに対し、叙述文では変更されていないのである。

以上のように修正された箇所と保持された箇所が、それぞれ引用符の内と外に配置されることで、『東岸紀事』においては叙述文と会話文間の文体的な差異が、版の変遷とともに浮かび上がる。言い換えれば、『東岸紀事』の方言修正と規範的な言葉遣いの使用は、ほぼ引用符付きの会話文に限定された「叙言分離体」に基づくものであるといえる。

では、上海語を母語とする作家である夏商は、上海語やその変種、他の地域言語を意識的に文学言語に取り入れようとしているものの、ほとんどの場合、方言の使用を会話文に限定する「叙言分離体」を採用するのであろうか。この自己制限がなぜ必要なのかを解明するためには、叙述文の特徴的な機能を考察する必要がある。

上述したように、『東岸紀事』は非線形の物語構成を採用し、主人公・喬喬を中心に物語が進行する中、物語の本筋とは直接関連しない数多くのエピソードが挿入されている。これらのエピソードは、表１が示しているように、基本的に『収穫』版には収録されず単行本の初版で増補されたものである。叙述文の中に特定地域の風俗に関する文化記号の解説が行われ、物語の世界とは直接関連しない解説がほとんどである。例として、『東岸紀事』の第三節における、浦東高校の沿革を紹介する場面を見ていく。

この場面では、主人公喬喬は飲食店の窓から母校である浦東高校の教育棟を眺めつつ、高校時代を懐かしむところから始まる。その際、学校の創立者楊斯盛の経歴が語られる。楊斯盛は清朝末期に浦東で生まれ育ち、建築プロジェクトで成功を収め、その資金で西洋式の大規模な教育施設である浦東高校を創立する。また、初代校長を務めた黄炎培は、中華人民共和国成立後、政府の要職を歴任した人物である。

> 浦東高校が完成した後、初代校長として招聘されたのは、後に政務院副総理を務める黄炎培であった。当時、黄炎培は広範な交友関係を持っており、彼に心服する者も多かった。教師陣には、陳独秀、郭沫若、沈雁冰、惲代英といった有名人が揃っていた。学校の全盛期には「南の浦東、北の南開」（※当時、南中国と北中国で一番優秀な中学高校を指す併称）と評されるほどであった。授業料は死ぬほど高く、各地の名家の子弟たちは浦西から小形の舟に乗り、貧しい地域である六里橋に渡った。革のスーツケースには重い銀貨が詰められており、上陸する際には荷役従業員の助けを借りなければならなかった。蔣介石の息子の経国、緯国、左聯の冤罪で亡くなった胡也頻、殷夫、映画監督の謝晋、小説家の馬識途もここで学んだことがある。
>
> 1949年以降、学校は徐々に衰退し、かつての有名教師が教鞭を取ることはなくなり、敷地面積も侵食され――隣接する六里野菜市場がその土地を占め、白蓮川に隣接する広大な民家も、校舎や園芸が撤去された後に形成された――目立たない田舎の高校となった。学生の主体は農家の子弟へと移り変わり、校内は地元の浦東弁が飛び交うようになっていた。稀に都市部から転入してくる学生もいて、彼らは都市の暮らしを鼻に掛ける。しばしば、地元の生徒たちは、彼らのファンとなり「洗練された」都市部のアクセントを真似て追従した。[18)]

このように、作中人物が登場しない物語世界の時空枠を超えた浦東高校の沿革が解説されている。近代的な浦東高校の発展という局所的な事象を通じて、その地域が辿った歴史が彩り豊かに語られている。これこそは、浦東という地域単位に焦点を当て、その地域に即した文化記号を取り入れつつ、規範的な言葉で書かれた解説と言える。このような、物語の途中介在する解説は『東岸紀事』において枚挙に暇がない。

日本文学研究者である宮崎靖士が提案した「方言」使用に関する類型学を援用すると、このような解説は「物語世界外の語り」に該当する。つまり「『事実』そのものだけを『客観的』に提示するような“中立的”—『事実確認的』な語りと親和的である」[19)]。また、これらの解説は、一方的な価値基準を回避し、現実の歴史的事実を指摘する「一般化」に該当する。

チャットマンは、普遍的真実や現実の歴史的事実に言及する解説を「一般化」と称し、哲学者のロレント・スターンによる次の文章を引用して「一般化」とは何かを説明している。

> フィクションの文章が作りごとを述べる文章であるとは限らない。それらのなかには、まさしく次のようなことを述べる文章がある——普遍的であれ相対的であれ、明確に論理的な事実、言葉の暗示的意味、

18） 夏商前掲書『東岸紀事』、38 頁。原文「浦東中学落成後，延聘的首任校長是後来当過政務院副総理的黄炎培。黄炎培当時的面子在江湖上已有人買賬。教師中不乏赫赫有名的人物：陳独秀、郭沫若、沈雁氷、惲代英……学校鼎盛時有“南浦東、北南開”之説。学費貴得要死，来自各地顕赫人家的子弟従浦西踏上小舢板，擺渡到窮郷僻壌的六里橋。皮箱里装満了沈甸甸的銀洋鈿，拎上岸要找夥夫幫忙。蔣介石的儿子経国、緯国，左聯的冤死鬼胡也頻、殷夫，拍電影的謝晉，写小説的馬識途都在此求過学。//1949 年以後学校慢慢衰敗，不再有名師執教，面積受到蚕食—与之毗隣的六里蔬菜市場占的就是它的地皮，緊挨着白蓮涇的大片民居也是校舎与園芸被推倒後形成的—淪為一家不起眼的郷村中学。農家子弟是学生主体，校園里叽里呱啦都是郷気的浦東話。偶有市区来借読的学生都“神抖抖”的，而土著同学往往成為他們的擁趸，跟在後面模倣着“高雅”的市区口音。」

19） 宮崎靖士「日本近代文学における〈方言〉使用の類型学——近代小説の語りの形式面との関わりから」、『日本近代文学会北海道支部会報』第 5 号、2004 年、54 頁。

経験的な一般論、人間性の経験的法則であるとか、またこのほかに、私たちの現実世界では当然のこととして受け入れられていて、そして通常、文学作品を理解するのに必要とされるあらゆる種類の前提、などである。[20)]

物語世界外から登場人物の視点を媒介せずに物語を叙述することこそが、叙述機能の中心に据えられている。これらの叙述機能をさらに細分化すると、浦東に関する文化記号の如実な解説や、登場人物の行動を評価する際に用いられる方言語彙の解説（即ち「解説される方言」）などが含まれる。それらの叙述機能を遂行するためには物語世界の外部に棲息する万能の叙述者が必要である。

また、そのような叙述者が使用する言語が、登場人物が使用する言語、即ち会話文で引用される言語と異なるのは自然なことである。登場人物が操る方言は、意思疎通を図る日常のコミュニケーションのため、歴史的に形成された生活言語である。これは「『文学的』な比喩や象徴的な手法を」用いて「自分の周囲に自然と存在する風景を、敢えて描述する必要性をそもそも持たない」[21)] 言語である。つまり、生活の周囲に自然に存在するものである以上、生活言語は目に馴染みのある風景や、耳に馴染みのある言葉遣いなどの事象を独立したカテゴリーとして抽出し解説する必要性を持たない。さらに、直接知覚できる身近な事象を敢えて歴史や文化など、日常の相対化と一般化が要請される視点から伝達することに、生活言語は向かないものであるといえよう。

このため、「一般化」された描写や解説から、一定の抽象性を求める価値判断や理論的言述など、重層的な叙述機能を遂行しなければならない近

20）　シーモア・チャットマン、玉井暲訳『ストーリーとディスコース――小説と映画における物語構造』水声社、2021 年、305 頁。
21）　坂井洋史『懺悔と越境――中国現代文学史研究』汲古書院、2005 年、462 頁。

代小説の叙述文にでは、書記化された生活言語を文学言語に取り入れることがその「境界」を形成する。換言すれば、文学テクストにおける方言使用の射程は、複雑な機能を担う叙述文によって原理的に制限されている。それ故に、引用符で括られた会話文は、実際には方言使用の「境界」を示しているのである。

おわり

本稿では、夏商『東岸紀事』における方言修正を中心に、上海文学における方言使用の実態を考察してきた。その上で、「版本批評」の導入によって、作者の文学言語における修正実態と文体的な特徴を把握してきた。

『東岸紀事』における文学言語の修正は、会話文における単独で意味を有する「実詞」を規範化された表現から方言語彙へと置き換えることに集中している。一方で、叙述文においては方言語彙への修正が施された箇所は少ないが、家族や親戚の呼称・罵り言葉や熟語など限られた語彙は保持されている。これらの修正および保持された箇所は、それぞれ引用符の内と外に配置されることで、版の変遷とともに『東岸紀事』においては叙述文と会話文間の文体的な差異が浮かび上がっている。言い換えれば、方言修正と使用は、引用符付きの会話文にほぼ限定された「叙言分離体」に基づくものであるといえる。

修正において徹底された「叙言分離体」は、読みやすさを配慮しながら、歴史的な蓄積が乏しい上海語と各種の地域言語を取り込もうとする戦略であると考えられる。加えて、引用符付きの会話文の境界をはみ出す方言語彙、すなわち「言語内翻訳」が難しい罵り言葉や熟語などが叙述文にも散見される。

これにより、近代文学が要請する中立的かつ脱地域的な叙述者とは異な

り、地域的な言語を用いることを排除しない新たな叙述者の姿が窺える。ただし、本稿で取り上げた作品例はおもに規範的な表現を機械的に方言語彙に置き換える修正作業がほとんどであるため、真の意味で「叙言分離体」を超越することはない。これについて、「叙言分離体」を超える作品例が存在するか、また『東岸紀事』以外でこの枠組みを踏まえた修正を行う作品について引き続き考察する必要がある。